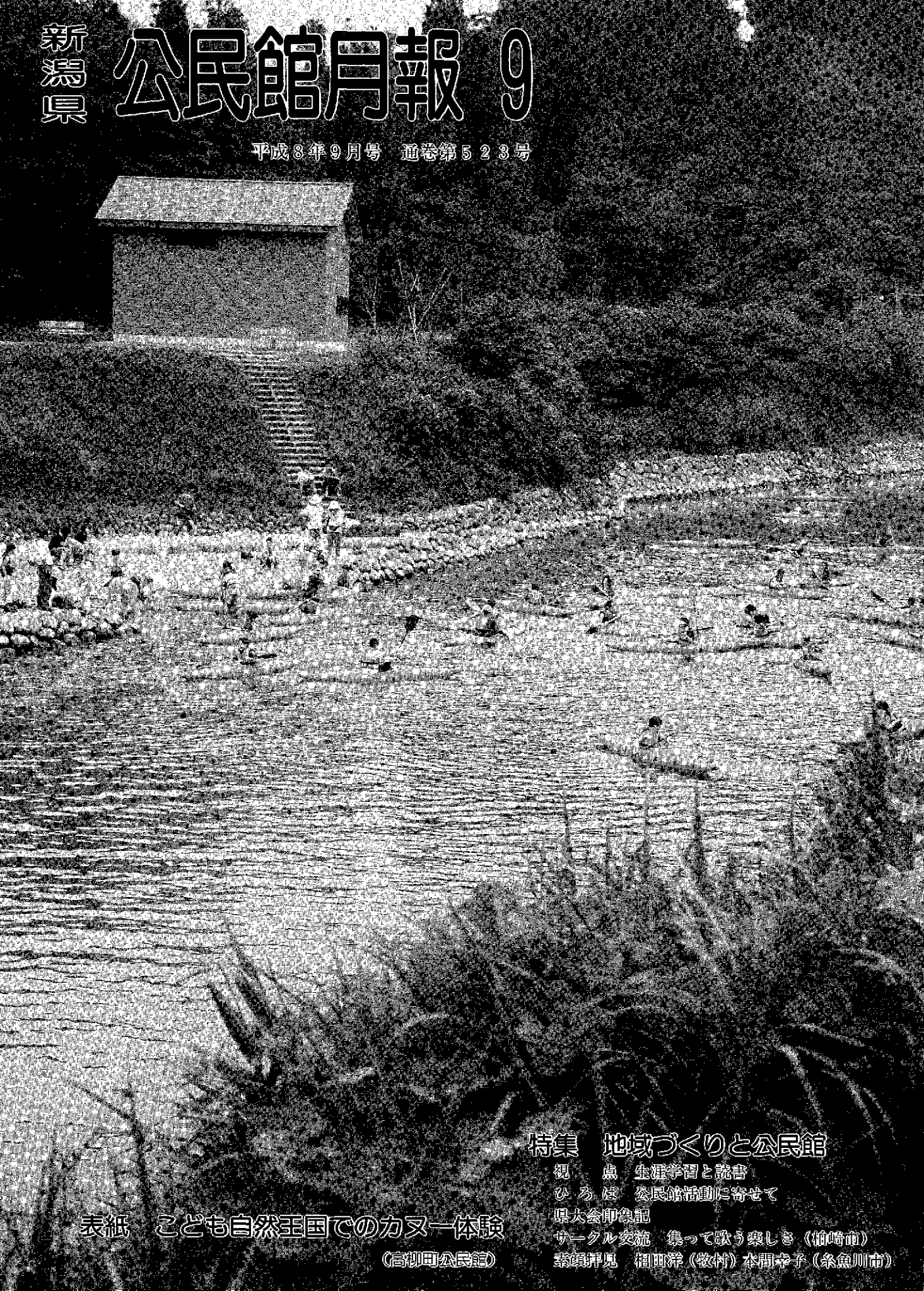
新潟県

公民館月報 9

平成８年９月号　通巻第５２３号



特集　地域づくりと公民館

視　点　生涯学習と読書
ひ ろ ば　公民館活動に寄せて
県大会印象記
サークル交流　集って歌う楽しさ（柏崎市）
新顔拝見　相田祥（牧村）本間幸子（糸魚川市）

表紙　こども自然王国での力又一体験
（高柳町公民館）

特色を生かした研究大会

「社会の変化に応えよう」をテーマに

鬼怒川温泉に集う千三百名

去る八月二十九・三十日の二日間にわたって、第三十七回関東甲信越静公民館研究大会が、栃木県公民館連絡協議会の主管により、鬼怒川温泉あさやホテルを会場に開催された。

参加者総勢千三百余名が一堂に会して、研究テーマ『社会の変化に応えよう～21世紀につなげる公民館』に向けて、十六分科会に分かれての大研修会であった。

この三十七回研究大会を契機に、主管公連の独自色を強めようという関ブロ理事会の申し合わせに則り、栃木色の浮き出た特色ある大会であった。

その特色の第一は、二日間にわたって一堂に会して研修の実を挙げることができたこと、加えて一都十県の全参加者による情報交換のできた点は鬼怒川温泉ならではのことであろう。

第二の点は、分科会速報の制作を取り止めた英断である。

参加者の中には若干の物足りなさを感じた向きもあろうが、速報づくりのために深夜まで取り組むエネルギー消費の割に、出来た速報内容の不十分さや不正確さを考えるとき、栃木県公連の勇断に賛意を表したい。このような新鮮味のある研究大会に魅力を感じてか、本県からの参加者は五十一名と近年にない多数の参加者であった。

一堂に会した1,300余名

本県担当分科会

家庭教育と公民館

本県が担当した分科会は「家庭教育と公民館」で、

発表者　熊谷　いみ子氏（新潟市東地区公民館社会教育指導員）

司会者　伊藤　高氏（新潟市鳥屋野地区公民館長）

助言者　本望　雅子氏（新潟県教育庁生涯学習推進課社会教育主事）

の三氏によって充実した分科会が展開された。この分科会のねらいは、「家庭の教育力を高める方策と、いじめの問題への対応策」にあった。

開会の冒頭から司会の伊藤氏の機知に富んだ手法により参加者の気持ちをリラックスにさせたのが効を奏し、和やかな雰囲気の中で真剣な討議が展開されていた。ちなみに、取り上げられた内容の主なものは、

①女性のライフサイクルからみた家庭教育の在り方、

②父親を家庭教育に参加させる方法、

③いじめ問題に対する（他機関との連携会議や講演会などの底の浅いものではない）根本的対応策、

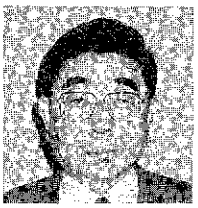
などに論議が集中していた。

上　分科会開会冒頭の三役紹介の図
下　事前の分科会細部打合せスナップ

関ブロ大会印象記

第一分化会に臨んで

三条市井栗公民館長　鍋島　征



8月末日栃木県下で開催された第37回関東ブロック公民館研究大会に参加した。昨年12月に当職に就任し初の参加である。

千三百名が一堂に会し「社会の変化に応えよう～21世紀につなげる公民館～」を主題に16の分化会に分かれての研究大会。

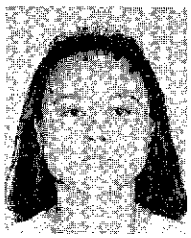
第一分化会は「公民館の管理運営」がテーマで、最も基本的な課題なので私はそこに参加した。参加者171名、分化会はせいぜい50名位いの規模と思いきや、あまりの多数で、論議がうまく進むのかと懸念したが、矢張り結果は心配したとおりであった。司会や発表・助言は埼玉県が担当。草加市中央公民館長が同市の活動状況や今後の課題について発表。その後、これについての質疑で殆ど終始した感があった。限られた時間なのだからもっと意見の交換ができる計画的な運営が欲しかった。

各自治体の状況は様々であるが、住民の要望は複雑多岐にわたり、公民館機能のみでは対応しがたいことはどこでも同様。行政や関係機関団体がうまく対応できるような公民館が旗振りとなって、粘り強く辛抱強く取り組むことが使命だと感じたことである。

視点

生涯学習と読書

大崎伸江



公民館誕生50年を記念し、去る7月26日、栃尾市で開催された県公民館大会は、たいへん有意義でした。スライドで観る公民館50年の歩みでは公民館設置の当時の人々のエネルギーのすごさに感動すら覚えました。

戦後50年を経て今の社会はどうでしょう。民主主義を利己主義と誤って解釈し、人格無視の競争社会で、モノの豊かさを追求するあまり、色々な問題が起こっています。そんな社会の中で一番弱い立場にある子供や障害者は本当に住みにくく「生きがい」を見つけるのが困難な状況なのではないでしょうか。

しかし生涯学習社会の実現が、人の心に潤いを与え、人間としてよりよく生きられるとするなら、まず私達の身近な問題から、できる事を始めなければと思うのです。

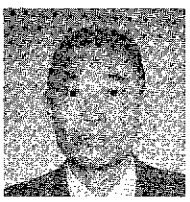
そんな中で私が最近特に感じる事の一つに若者の活字離れがあります。幼い時から本に親しみ、想像をめぐらしたり感動を味わう事は、心を育て、生涯に渡って自ら物事を考え判断する力を養ってくれるのではないでしょうか。今の子供達はTVゲームなどに熱中してはいますが、読書の楽しさを知る機会をうまく与えてやれば、活字の世界に戻ってくるはずです。微力ながら私も当公民館で「おはなし玉手箱」と題し月一回の読み聞かせを子供達と楽しく始めたばかりです。

（見附市葛巻公民館運審委員）

ひろば

公民館活動に寄せて

堀之内　竹司



私と青空公民館の付き合いは軍隊から先輩が復員した終戦後の、物も金もない時代のことです。集落の若者達が集まり、少しでも教養を身につけようと話し合い、文庫会を作ることにしました。当時は単行本が高価でしたから、まず各家庭から古本の寄付をお願いし、多くの本が集まり感謝したものです。運営のための資金として米一升運動をしたり、文庫の管理には、寺の観音堂の一遇に疎開していたおばさんに頼んでいましたので、集落の皆さんから利用され喜ばれました。また、神社の境内で映画会を開催し大盛況でした。

集落の九割が農業に関係していたので、米の収穫を増やし、生活を豊かにしようと農事研究会をつくり、寺の一室を借りて研究会を開いたり、先進地視察の研修もやりました。

また、書道の会をつくり、先生の一室を開放してもらい手習いをしたのもこの頃のことです。昭和三十年に集落に公民館が建築され館（やかた）のある公民館となりました。

公民館が誕生して五十年、各市町村に立派な公民館ができまして、生涯学習に取り組んでいます。行事黒板にはサークルなどの行事がびっしりと書きこまれています。でもそれをみると貸し館の気がしてならないものばかりです。

もっと公民館の主催事業を活発にしたいものです。例えば、週休二日制と学校週五日制が公民館とどうかかわっていくのか、児童が利用するのを待つだけではなく、公民館のほうからも、老人会や婦人会などとタイアップして児童と一緒にできるスポーツをもつなどが大切であろうと思います。人と人とのふれあい、ボランティア活動などにより助け合って生きることの大切さを学ぶことなどが今公民館に求められているのではないでしょうか。

（巻町公民館運営審議会委員）

追って　と公民館
ツションに現われた問題

一、はじめに―問題の所在

栃尾市市民会館で開催された第四十七回新潟県公民館大会で「生涯学習社会をめざした公民館の役割を考える」というパネル討議がなされたが、そこで意外な問題が浮き彫りになった。というのは、「これからの生涯学習社会にむけて公民館はどのような事業が大切になると思うか？」という問いに対して「まちづくり、地域づくりの一層の充実と、そのための学習活動」という答えが90％だったが「今地域づくりに取り組んでいる公民館は？」の問いに答えたのは10％に満たなかった。この落差はどうしてなのであろうか。

二、「実態」の低調なわけ

言わでものことながら、公民館の特色（特性）は、地域性を重んじ、地域に根をおろし、地域の人々の生活課題や地域課題の解決を目指した事業に取り組む施設であることは誰も異論をはさまないであろう。

地域課題に取り組む事業それ自体が、直接であれ間接であれ、「地域づくり」の活動に他ならないであろう。だからこそ、これからの公民館のあり方について、地域づくりの学習や活動に力を入れたいという「願望」が90％を越えているのであろう。それにもかかわらず、この落差である。

その理由について、パネルディスカッションにおけるコーディネイターの軽妙にして深みのある司会によってパネリストやフロアーから本音の意見が続出していたので、その発言の要旨を取り上げて考えてみよう。

〈表1〉
県内公民館（本館）の職員数
（新潟県教育委員会平成7年10月刊 生涯学習・社会教育の現状より）

	専任	兼任	非常勤
館長	21	40	224
	7.3	14.0	78.5
主事	158	408	
	27.9	72.1	
その他	42	26	220
	19.0	11.8	69.0

1　公民館事業の多様化と職員体制

学習内容の多様化、高度化、個別化など学習活動の専門性とともに、よろず屋・便利屋的性格を強いられる傾向にある今日の公民館では、このような地域の人々の学習ニーズに応えるための職員体制の不備がまず最初に指摘されていた。

地域づくり願望はこの挙手のとおり

加えて近年の職員の勤続年数の短期間化傾向は、「地域づくり」という地域の人々とのコミュニケーションを必要とする事業や住民自治にかかわる事業には容易に取り組めないでいるようである。

発表者の中には公民館職員と社教行政、文化財行政の仕事の三役兼務も決して珍しくないということであった。ちなみに、県生涯学習推進課による調査資料（表1参照）によってもその実情がうなずける。

2　「地域づくり」認識の差

複数公民館を設置している市町村の中央公民館や全市町村一館設置といういわゆる中央公民館的役割の公民館の場合と地区館・分館など（さらには集落公民館をも含めた）小地区をサービスエリアにしている公民館との間の認識の差が大きな要因となっているようである。

この二つの類型で公民館をとらえると、全市町村対象の公民館の方が、どちらかというと「地域づくり」への取り組みが難しいことが分かる。

(a)　ある町の公民館では、町にボートレース場誘致の問題が起こった。その是非の検討のために公運審委員が立ち上がって意見をまとめたのだが、誘致を推進する委員会によって、公運審の動きを封じる態度にでたという。町の政治問題となって教育委員会も動きがとれなくなってしまったもののようである。

このように、せっかく公運審の委員が地域課題を取り上げようとしても、頓挫してしまうこともある。町全体の住民によって取り組む地域づくりの難しさを示す事例といえよう。

(b)　また、近年一部の市町村では、一般行政部門に地域政策課（係）を設け「地域づくり」に関する事業を進めるようになっているという。そのため、公民館は何をやるべきかということに迷っているともいう。そうしたところでは、主役が一般行政部門のため、公民館は脇役にまわったり重複や競合を避けるために手を引くような場合も多いという。それよりは、職員体制の不備をカバーするために、一般行政部門に任せてしまうというのが本音なのかもしれない。

(c)　生涯学習の推進展開のために「生涯学習のまちづくり」が進められるようになった。そこでは地域づくりの活動が市町村全域に拡大する傾向がある。それも、公民館のみでなく、他の一般行政部門の機関等と連携するということがみそであるとされるようになったが、そのことで、むしろ地域づくりはやりにくくなったという声もあった。

またそれにより地区館・分館等の小地区では、「まちづくり」がだんだん離れていくようだという発言もあった。

(d)　「公民館は生涯学習のまちづくりに貢献する人を育成するのだ」というが、それは理想論で

シリーズ　課題を

地域づくり

本音のパネルディスカ

あり建前論だ。また、目指すものが次第に高度になって一般の人々にはついていけないようになっている。」という厳しい発言もあった。

以上のように全市町村を対象とする公民館の立場からは、「地域づくりの必要を感じながらも、やれなかったり、どうすればいいのか迷ったりして結局は他に任せてしまう事になるのが多い」という発言に対して、地区館等の公民館の関係者からは、積極的に「地域づくりに取り組んでいる」という事例の発表が多かった。

(e)　ある公民館長は、過疎の集落の生存をかけて「わが地区は生き残れるのか?」という、地域課題に直面して、「地域づくり」は地区主導であってこそ、タイムリーな地域課題に取り組めるのだと、取り組みの事例を話していた。

(f)　ある集落では七人の女性高齢者グループが力を合わせて野菜による副収入の増をはかりつつ、一方では集まることによって触合いを深め、家庭のこと、地域の問題を話しあっている。これこそ地域づくりの原点であろうと発言していた。

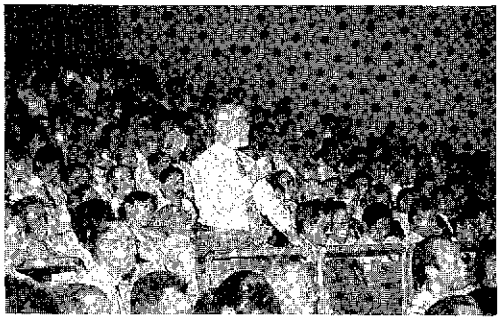
(g)　集落における「あいさつ運動」にふれ、地域づくりは、日常生活の中にあるものだという主張もあった。集落の人々が、朝、顔を合わせたとき〝お早よう〟と笑顔で挨拶を交わし合うことが地域づくりの第一歩だというのである。

これらの事例によって、「地域づくり」の活動は、全市町村的な範囲の活動よりは、より細かい地区的な活動のほうが成果をあげているということの証左であろう。

3　行政主導の地域づくり

先にふれた一般行政部門での地域づくりの場合は、ややもするとイベント中心の地域振興になりがちのようである。取り上げる内容も観光開発をベースにした誘客本位であったり、単発のイベントであったりする傾向がみられる。それが悪いわけではないが、そこに住む人々の「願い」がこめられているのか、地域の課題をそこに住む人々の手によって掘り下げ解決しようとしているのかによって、公民館の取り組む「地域づくり」との間に違和感を持つことになろう。

4　公民館は「地域づくり」と関わりがないのか



「地域づくりは住民の自主的活動であって、公民館は教育する施設（機関）である。地域振興の手段ではない」という意見も出されていた。公民館の役割は、地域づくりに直接取り組むのではなくて、そのための組織づくりを支援するにあり」という主張もあった。

ここに発言した人たちばかりでなく、最近は「地域づくり」というと、それは公民館の関わるべきことではないという意見が多くの公民館関係者から聞かされる。だが、公民館の機能を考えた場合、果たしてその意見が正当なものであろうか。「地域づくり」と「地域振興」に分けて考えると答えは明確になるのではあるまいか。このことについては、「まとめ」の項で私見を述べたい。

三、まとめ―地域づくりと公民館

「地域づくり」の実践がなぜ低調なのかについて検討してきた。そして、その直接的な理由はほぼ明らかになった。しかしなお、二つのことがはっきりしないように思われる。その一つは「地域づくり」に対する概念の不明確さにある。「地域づくりとは何か」についてを明らかにする必要があるが、ここはそれを取り上げる場ではない。このことについて、知りたい向きは、全国公民館連合会機関誌『月刊公民館』の連続講座新しい地域づくりと公民館Ⅰ～Ⅸ（平成3年2月号通巻第405号～413号）に詳細掲載されているので参照されるとよい。

二つめは「生涯学習まちづくり」にかかわる疑問である。

今日の社会では、学習の高度化・多様化とともに「学習の個別化」もまた学習課題である。生涯学習の推進の方向としてこのこともまた欠かせないことであろうと思う。個人々々の関心にしたがい、多様な学習活動を展開するいわゆる「脱地域化」の方向に進みつつあるのは当然のことである。

これに対して、公民館が「地域づくり」の活動に取り組もうとする場合、地域連帯ということが重要になる。地域の人々が共同して、共通の学習課題を取り上げようとする、いわゆる従来からの社会教育の手法が不可欠の要素と思われる。すると脱地域化の学習展開になろうとする生涯学習と公民館の「地域づくり」とは相反することになりそうである。ここに問題があるのではあるまいか。

「生涯学習のまちづくり」というのは都市化の進展に伴う脱地域化と地域連帯意識の取り戻しとのジレンマを克服するための掛声のような気がする。その〝まちづくり〟を一般行政が旗振りをしているのが気になるのである。公民館の現場で「地域づくり」実践の低調な理由のおもとはここいら辺にあるのではあるまいか。

（上）

県公民館大会印象記

「豊かな地域づくり」

中越地区公民館連絡協議会長　武樋清徳

公民館誕生五十年を記念して第四七回新潟県公民館大会が戦国の名将上杉謙信公ゆかりの地栃尾市で見附市・栃尾市・三島古志郡公連の主管により主事部会の協力を得て盛大に開催された。スライドによる公民館五十年の歩みを通し、私達先輩が社会構造、住民意識の変化の中で幾多の困難を乗り越え今日の公民館の発展に貢献された姿が大変印象深く、この五十年の歴史をどう継承し発展させていくかが私達にとっての大きな課題であると痛感した。パネルディスカッションでは地域づくり学習をどう進めるか、地域の拠点中核施設としての公民館のあり方、体制づくりなど本音での活発な意見交換が行われた。「物の豊かさより心の豊かさ」「まちづくりは人づくり」が求められている今日パネラーの実践発表を通してこれからの公民館活動は、地域づくりを中核とし、地域の個性、独創性を生かした住民参加による積極的な事業の展開が重要であると認識を新たにしたところである。公民館の在り方が問われているなか公民館の役割「集い、学び、結ぶ」のため、公民館人としての感性を身につけ肩肘張らず地域住民の幸せと生涯学習社会の構築に向け頑張りたいものである。

（長岡市中央公民館長）

手づくり公民館大会は皆さんの連携で

大会実行委員長　今井十志崇

新潟県公民館大会は、去る七月二六日炎暑の中開催されました。私は、大会当日スタッフとして動いていたので、参加者の白熱したパネル討議を直接聞くことができず誠に残念でありましたが、それに替わって、大会主管関係公民館の自治体を越えた連携により生まれた「手づくり公民館大会」の実行という実に心強い体験をしました。

中越地区公民館連絡協議会には、郡市代表から成る「主事部会」が設けられていますが、第四七回県大会開催地が中越に決定すると、主事部会の皆さんが、素早くテーマや日程はどうすべきか？　また資料は？　等々……目的達成に向け積極的に取り組み、特に今大会主要研究協議題である全県下対象の意識調査の内容検討から集計・分析まで汗を流していただきました。

手づくり大会のため、県公連・中公連事務局には多大なお手数を煩わしたことを存じますが、各々の公民館主事の連携があってこその大会でした。

終わりに、今大会参加の六八〇余名の皆様に感謝申し上げ、また来年度村上市でお会いしたいものです。

（栃尾市公民館長）

裏方に徹して

中越公連主事部会長　小林宏行

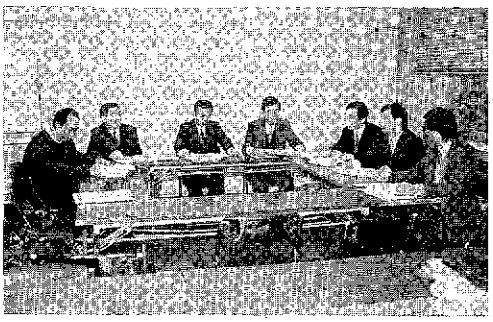
第47回新潟県公民館大会が中越地区の栃尾市で開催されるにあたり、中越地区公民館連絡協議会主事部会（平成6年発足）として、どういう形でお手伝いをしていったらよいか。昨秋より検討を重ね、この大会参加者の一人ひとりがあらかじめ問題意識を持って、大会に参加してもらうために「これからの公民館の在り方」に関する意識・実態調査を全県規模を構想して実施したらどうか。という結論に達し、今春県内各地の公民館長、職員、公民館運営審議委員の各位からご協力いただいたところである。

さて、この調査が、県公民館大会の主要研究協議題に生かされていたかどうか。基調提案からパネルディスカッション、まとめに調査結果がうまく反映されていたかどうか。その評価はどうであったでしょうか。

とにもかくにも、この大会が無事終了するまで、何とか盛り上げ、より多くの参加者が得られるよう、又、参加された方が一つでも〝何か〟を感じとっていただけるよう、主事部会としては、裏方に徹して協力させていただいたつもりである。

「大盛況おめでとうございました。画期的な企画いろいろ学ばせていただきました。」と参加者からの声を頂戴し、一応の成果が得られたのではと感じているところである。

（十日町市公民館副館長）



サークル交流

集って歌う楽しさ

ヤッコラサーズ

歌うことが好き、皆さんにお会いすると元気が出るからと、月、二回集っています。

昭和四十五年十月、六十歳代を中心に二十名程で発足、新旧の交替がありましたが、四十名と数えるピーク時もありました。童謡をはじめ、二部、三部合唱をマスターして、テレビ出演したり、施設慰問や交流会に声がかかり喜んで参加しました。『人の悪口を言わない』が会のモットーです。お互いに励まし合い慰め合って現在に至りました。残念なことに、過半数の会員が亡くなられ、現在、在宅療養の方、入院中の方があって、十五名の会員です。

十時から一時間半、童謡や季節の歌曲を歌い続けます。誕生月の方にお祝いの歌をプレゼントします。間もなく〝野に咲く花のように〟の合唱が完成します。終わって三十分間、貴重な楽しいティータイムです。お帰り時の皆さんの活き活きとしたお顔の輝きと、私は生甲斐を感じて、伴奏をし続けております。

（柏崎市ヤッコラサーズ指導者　伊藤　静子記）

響け、山々にこだまの様に

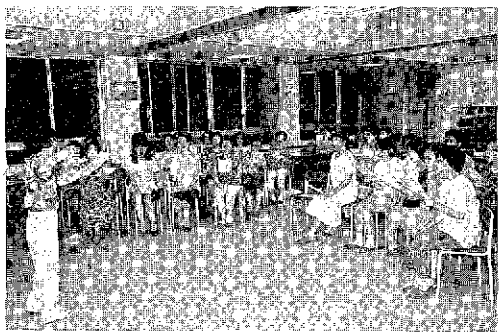
鹿瀬町混声合唱団

人口が三千人程度の町に戻り今年で6年目を迎えた今、この町にも様々な人々が生活している姿が見えて来ました。そんな毎日の中で、今回は声高らかに合唱を楽しむ皆さんを紹介します。

団員の活動を影日なたで支える団員の清野さんによると、この集いのキーワードは「多勢で合唱を楽しむ合唱団」という事でおおよそ猛練習などという言葉とは無縁なのだそうだ。月2回村上市より御指導に来て下さる豊田先生を中心に60数名の老若男女が、童謡やリパブリック讃歌を合唱し、楽しんでいる。今秋には、学校の文化祭やダ・カーポのコンサートに登場する予定もあり、楽しい集いにも若干、力が入っているとのこと。

それにしても、天高く馬肥ゆる秋。混成合唱団の皆さんにとっては、結成2年目を迎えて、澄みきった秋空に、歌声が響きわたる季節になりそうである。

（鹿瀬町教育委員会　伊藤　純一　記）



素顔拝見

牧村公民館　派遣社会教育主事　相田　洋　氏

前の勤務先は西山町立西山中学校。そう、学校の先生なのです。そんな訳でついたニックネームは『センセ』。今年四月、公民館に颯爽とデビューされました。

生涯学習戦線真っ只中の公民館。はじめは戸惑うことも多かったようですが、着実に前に向かって前進されています。

しかし、ひとたびお酒が入れば、一回りも年下の職員とはしゃぎだし、おまけにマイクでも持とうものならフルブースト状態！　手がつけられないほど盛り上がります。

今は柏崎の自宅から約一時間の通勤ですが、可愛いお子さんと綺麗な奥さんの顔を見れば疲れもふきとんでしまうでしょう。

今後ますます仕事が大変になると思いますが、村民のため、ご家族のため、そして〝おちゃけとまいく〟のためにガンバッていただきたいと思います。

（牧村公民館主事　岩崎　晃記）

糸魚川市中央公民館　主査　本間幸子　氏

糸魚川市中央公民館の女性スタッフは対照的な〝静〟と〝動〟の二人組。今回ご紹介する愛称〝サッチャン〟こと本間幸子さんは、〝動〟の分野で活躍いただいているバリバリの強力打線。きびきびとした動作ときわやかでユーモアあふれる応対は、青壮年からお年寄りまで幅広い層に人気があり、特に高齢者には絶大なる支持を得ています。

担当する高齢者学級、公民館セミナー、転入奥様スクール等では独創性を発揮してユニークな企画を次々と打ち出しています。個人的にも、山登り、自然探索のキャリアは長く、単なるブームに踊らされない芯の通ったこだわり派でもあります。現在高校生の娘さんとご主人の3人家族。

公民館勤務も今年で2年目、庶務畑から華麗な転身をとげて、ますます張り切る〝サッチャン〟に大きな期待が寄せられています。

（糸魚川市中央公民館　O記）

ネットワーク

公民館長研修会迫る
公民館の危機管理をテーマに

県立生涯学習推進センター主催の『公民館等管理者研修会』が左記要項のとおり開催されます。この研修会は当県公連も共催しているもので、振っての参加をおすすめします。

研修テーマは、公民館を主とする危機管理に関するものです。危機の管理には、自然災害のみでなく、経済・文化・社会生活などあらゆる部分にわたるものです。

阪神大震災の危機を身をもってくぐり抜けてきた講師によって、実体験を基にした危機管理のあり方を研修します。そこには、人々の心の安全管理にも及ぶ貴重な提言を得られる筈です。

平成8年度　公民館等管理者研修会

1　趣　旨
阪神大震災という不慮の災害は公民館の維持管理はもとより、住民の安全管理に多くの課題を提起しました。
そこで、被災地公民館の実体験による教訓をとおして、公民館の安全管理の基本を学び、危機管理への徹底対応を図る機会にする。

2　主催・共催　新潟県立生涯学習推進センター・新潟県公民館連合会

3　期　日　平成8年10月2日(水)

4　対　象　公民館長及び準ずる人　50人（定員になり次第締め切ります）

5　会　場　新潟県立生涯学習推進センター　大研修室

6　講　師　演題　「災害と公民館」
兵庫県西宮市中央公民館長　西村　治氏

7　日　程

9:30	10:00	12:00	13:00	13:40	15:15	15:30
受付	開会式	講義「災害と公民館」講師　西村　治　氏	昼食	講義への質疑応答	研究協議　各公民館の実情と問題点	閉会式

8　申込方法　(1)　申込締切日　平成8年9月20日(金)
(2)　申込先　〒950　新潟市女池2066
新潟県立生涯学習推進センター　宛
電話　025-284-6110

『月刊公民館』講読のおすすめ

『月刊公民館』は公民館関係者必読の唯一の全国誌です。掲載内容は、とびら・論考・実践事例・ロビー・奮戦記・誌上セミナー・わが町の公民館・時の話題・公運審サロン・トピックコーナーなど盛りたくさんな内容です。

特に「論考」「実践事例」は毎月タイムリーな特集テーマを定め、第一線の研究者等による専門的論文を掲載。それと連動した実践事例を紹介しているもので先進的な事例として極めて参考になります。

月刊、B5判、52頁、単価500円（消費税込み）送料76円で計576円です。購入希望の向きは、県公連事務局へ申し込んでください。

宛先はこのページ下段左隔の発行所と同じ。

表紙解説
こども自然王国でのカヌー体験

こどもたちのカヌーが鯖石川の川面に浮かび、楽しそうな声が川風にのって聞こえてきました。

（高柳町公民館）

あとがき

◆　お詫びと訂正、

先月号8面に掲載の「図書紹介」欄の中で、〝雪えくぼ〟の発行所を〝雪珠短歌会〟と記しましたが〝雲珠短歌会〟の誤りでした。

なお、同欄の解説文中に『長女を一歳の時、気管支炎で亡くした悲しみから…』とありますが、亡くなっておりません。現在なをお元気の由、当方の早とちりでした。非礼の段謹んでお詫び申し上げます。

◆　本紙の発行が遅くなりましたことをお詫びいたします。第37回関ブロ公民館研究大会の報告掲載のため、原稿渡しが遅くなったためです。次号から正規の発行日に戻しますのでご海容のほど。

（上村記）

発行所　新潟県公民館連合会
〒951
【新潟市川端町2—9・県林業会館内】
【TEL・FAX（025）224—6073】
発行人　会長　今井昭友
編集人　事務局長　上村　捨二郎
【定価1部150円〒共・年極1,800円】